# 開化のはなし

ヲ1
3483

# 武德

宮内省圖書寮

一冊

世法
評釋

之内

巻

内閣
文庫

# 五

松屋

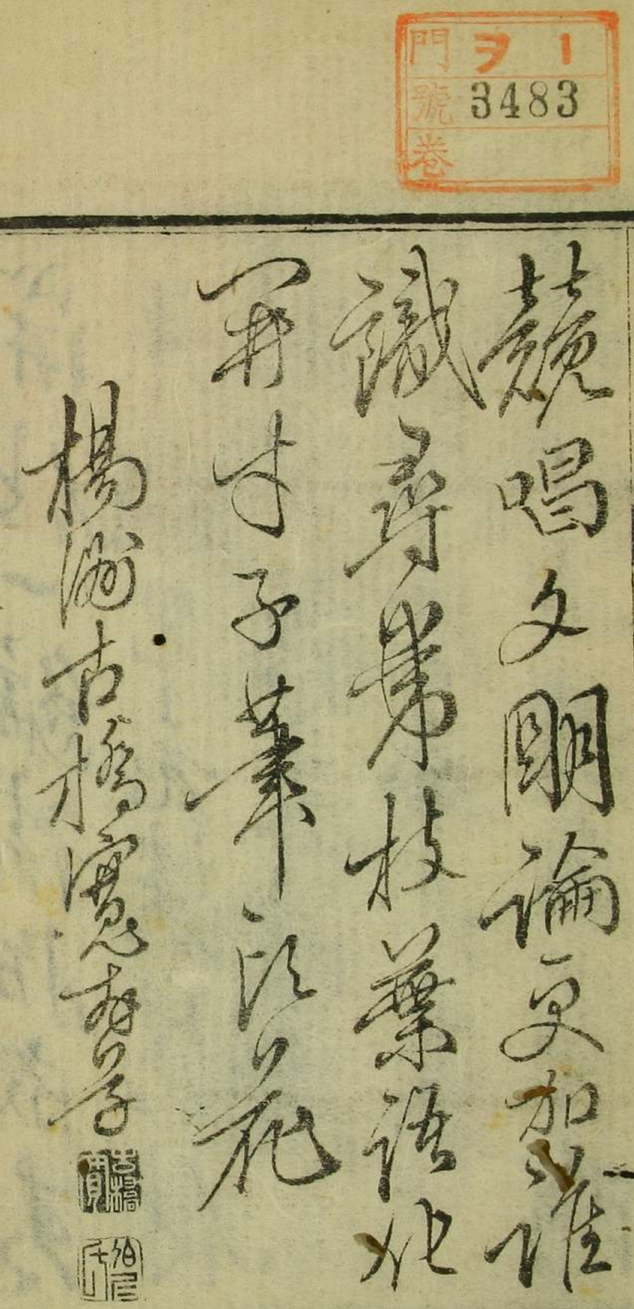
# 芙

題辭

開化一編談指成書
筆觀名家情体
煩俚語天諸源未
必陳蕪要大尊
孫鍾奇冊名家講

門 ヲ1
號 3483
卷






開化の文明論に加藤
徹齋先生
冊子菜根の花

開化の文明論に自叙

詩經に云く能く戲謔して謔を爲さざと戲謔も能くすれハ世道人心に益ある也とて優旃の秦に始皇に諫き劉貢父の王安石を悟らしむる如き正言莊語にて規諫するに比さしハ却て人心に感格せしむること多

昭和十三年
二月七日購求

し然れハ諧謔を開諭誘導孔
良資なして尋常繩墨に拘泥
するよりハ寧ろ勝れるといへし今此
書の如き鄙俚諧謔文脩辭擇言な
く事ハ空中の樓閣にて頗る寓言なる
渉ると雖も論ずる所活理有て存る
余ハ艸莽寒陋の一書生幸に文明の聖

代に遭逢し文明の改化に浴し鴻恩萬
一に報答せんとするに由るし因て思ふ
箝默して囊を括るハ荀卿が所謂腐
儒の徒なして咎あく譽なきを男兒の志
なハ非るべし劉向曰く善く言て行な
と能ハさる國の寶なりと然らハ此兒
園冊子も國家理民の上に於て牛溲

馬勃の一用あるんも亦知るべきなり是
訓誨誘導の意を書き華一洎
埃も聖朝の報する所以なり布衣の
微衷讀む者或ひは知るあらんか
治申抄冬屈軒散人不平窩丹識

得一新宮義書

開化の人那一卷の上

第一回

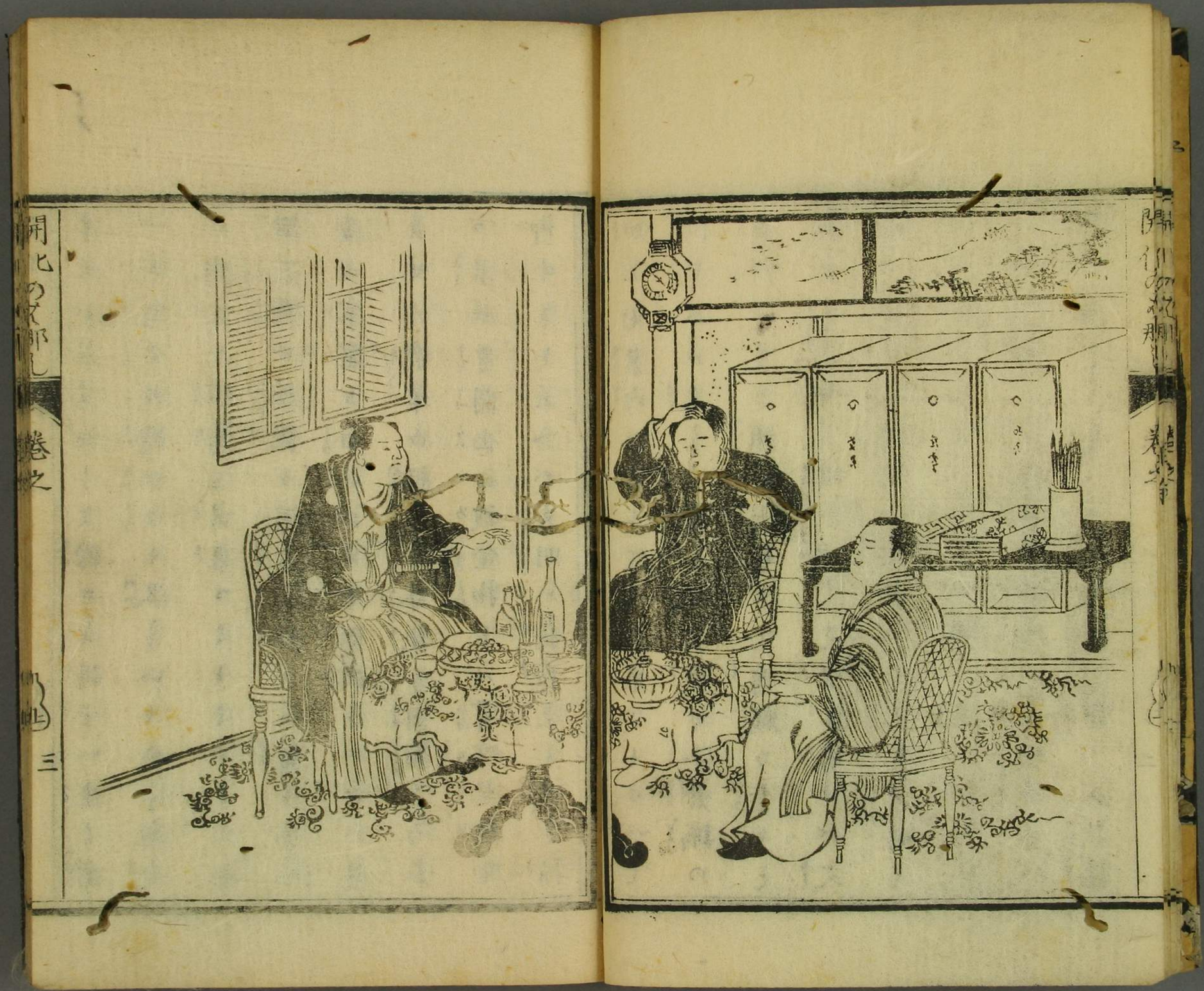
三人寄れば文明の開化論

曲肱軒主人著

爰ふ東京築地邊に住居せる姓は開化名
文明とふん云へる人ありて西洋
好きふて我家の日本風なるを無理に西
洋風に模擬て正室には花毛氈敷布き高

机倚子などを駢べ荷蘭書の赤き小口の
立派なる古本を五場店より買ひ来れた
子細らしく机の上に累ねて平凡人を驚
嚇し平居は洋服を着し自己の名の通り
開化々と口癖に唱へ一箇の軽躁子
なりしが一日机に倚り石橋先生の著
いせし英語箋を披き原字よりも目を注け
ど附傍の片仮字を讀み居るが誰とも

知らぬ案内を乞て入り来るものを
但見れば左りの手に提げ小倉織の
白袴をとき頭に大髻ふて前額を青々と
剃去り昂然と吹一吹して坐に着けば文
明の倚子を離れて忽ち石部君好く
去る御光来光つ倚子へ倚り玉へ相替ら
ず窮屈袴に厄界棒兎角開化に御進歩い
御不得手と見へるねと嘲言雑りに款接



せば苦笑ひして傍なる倚子へ坐り偖
文明君の開化々も久しいものゝね先
ず開化ハ容易く出来ることでいまし洋
服尖帽で外貌が異人に似たの鬚が生へ
多の家室が白いとく開化とハ云ハそ
ません我輩の様なる外貌を因循ぶろふ
が君の價開化の鍍金物とハ霄壤懸隔で
御坐ると云へば文明
明い發作来り僕を指



して價の鍍金のみとハ其意を得ないね是
ハ一場有興サア其分教を論ず玉へと逼迫
せば石部ハ大ひに笑ひ然らば其所由ハ
論じて聞せまし開化ハ蠻野凶暴の反
對にて未開の人民ハ禮義も知らず知識
も狭く人を苛酷くもさを何とも思
ハず上のもの下の弱きものを壓抑へ
下のものハ上の勢ひあるものに自由を

妨げられ愚痴文盲にて文明開化の國々の様なる禮義を尊び智を磨き學術も能く出来人々心正直にして道理を辨れぬ事なれば思ひの侭ふしゝ他人を妨碍さる事も多く交際ふるを好み表面の虚飾もなく行狀正しけれども文明と開化とも云つる事でおざる君の様なる花毛氈の時辰髪のと表面の虚飾ふ心

と用ひ尖帽を被つて文明とゝ洋服を着て開化とゝの無益を破鈔ふゝりハちと諸先生の翻訳書でも買つく閲て本心の開化をなすやふ學問でも志ざるゝ好了英語箋の片言隻語原語と一個二個誦しとて毒よりも藥よりもならぬ事で御坐る君などハ大抵嫖唱でもしあり藝妓で揚げると文明と思ひ礼義も無く疎放

措大と開化と心得違ひ奢侈贅沢のことを
して英吉利の風ざの放蕩狂しく佛蘭西
の真似ざのと開化の花と瞥然と見て実
は正味を御存知ふし開化々々と云ひ玉ふ
ものいやもや笑ふべし悶もだしざねと條
舉件説て恥らしむるバ文明の一言の返
答もあくさし俯向ひて居しが此家の食
客ふ一書生あり文明の問答もあく羞ら



いし体裁を見うねて其處へ入り来りて
石部と向ひ書の御高論隅屏聴して敬
服りまし実と文明開化ハ御論の通り
ちらし君ふ御尋ね申ふしい一事ざお
ざりまし見るバ君ハ毎常刀を插して御
出ふきものそれハ畢竟何の為ようさ
のでざそまそと問へバ恐ハ珎らしき
御尋問刀と云ふものハ身と所護るの重

器として大切なものでござる彼の西洋社
やふなる插ぬ風ではなれハ抜ぬ日
本の插き風あるべハ文明開化
の真似をするとて何ら何ぞ左様ふ
いさぎぬとも善ひでハなぎらぬ君も
文明君の食客あれバ大方鍍金物でござ
らふと飽くまで喋々罵るバ然ラハ日本
ハ刀を插ぬ風でござりまれる何ふ



を左様で御坐さいぎやふならい貴君も夷
狄未開の人民でござりまれ何故あれバ
刀といふものハ人を殺すの凶器にて戦
闘でも無けれバ入ぬるの日本ふるも
上古ハ平生ハ刀をさきといふなるい
て又刀ハ始終さして居る武士といふも
のもおし其後追ぞ武士といふものが自
然と出来源平の戦争ハ天文慶長の頃

までハ太平ハ必ずく争乱の日い多く諸
國の武士も何時敵ふ出逢ふやトも知れ
ず身ハ用心をしてすん戦争とハ直
ち戦場へ馳け付るもいとまもなく
ふ刀を腰ゑさして始終放さとふこと
いあるその因襲で太平の代ゑ武
士ハ刀をさし農工商の三民ハ武士ゑ
對ひて無礼過言ゑ切り捨ての手

打ちゑもるのと彼らゑ虎威を張る文具
とゑ就中愚痴漢ハ新刃の試し切りの
辻切りのと天ゑら生ずさ大切ゑ人間を
罪も無いふ命ゑ武邊武道と自慢を
るハ大逆といとふろ無道といふろ実
ゑ呆れたるまーまゑ無礼せーとて我意
ふ切害を事ゑ出来るばゑ司法の
官ハ入らぬ王法を犯せのハも重いの

自己ろ悪事ばかりて法を犯し陳言なくて
自裁もちと理違ひの出と刀ろ切るろろ
浅野侯ハ殿中で吉良公ヱ傷を負ハせ其
身ハ切腹家来ゞ復讐の騒きをしゞめて
又切腹式ひハ遺恨で闇打きれ其子ゞ仇
を打ち宮本無三四の田宮陽太郎のと四
忠臣孝子もその為ヱ名を著ハせども人
倫の鑑ヱ逢ふて是非ゝ人を切害やや

ふかとゝゞ出来ヱいふハ人民の愚痴
兇暴ヱて道理ヱ明るくないうゝといふ
ものゝ畢竟力といふ凶器ろ常ヱ腰ヱ
さゝゝ遺恨の時殺争闘の接双も裳出
ことゝ思ハれまゝ君ゝ野郎頭ハ何
事で御坐りまそ出ども亦日本の風と君
ハ思ひ玉いんけれど聊ろ左様で御坐り
ませぬ言二語四も胡話けどども序でヱ

云ふて開せませふ前額を剃るも近代の
弊習なれども是も亦戰國の世一年九二年を
戰爭が續き兜を永く冠りて毛の中に風
を生じるより生ずゆへに前額は剃去て氣
を拔き其汚穢を防ぎしより起りしと
古へより天子の前髪を御剃りあそばれる
と云ふ事の無いは此確證なれ腦とい
ふものは人間の神經と通じ知覺の應用も





されより生ぜ夫も一に造物主が毛といい
ふものを濃く生やし容易く傷も受ぎ炎
き日にを照ドされば寒き風ふをゆてぞ
して大切に擁護せらるるもそれを知
らば青々と剃り出る日本の風といい何
事ぞ君も大分文明開化の正味を御了解
で出れしの事が天理に合ひ合わぬ
知るまるもの火吹き達磨の生靈此や

ふゝ風くと云わぎと天然の道理に目を
注け刀のやふ凶器を終久も插を頭も
毛を存して西洋の風でも天理と合ひさ
ゝ美事ゝとゝ本國の弊風い止めて彼邦
のよい真似をされ君も幼少より頭を
剃て脳ゝ寒熱ゝ中てらを知識ゝ偏隅て
一を知つて二を知らぬ偏屈人とあらを
たゝんと說き伏せられて茲然と醉へ

るが如くいやもりはゞ恰好外面を通ゝ醉
客と見へ大音揚て狂詩を吟ずゝを聞け

ハ

時値文明開化春　廢刀斬髮各鬪新
身上洋衣英雜佛　懷中時計金耶銀
本心未脫蠻夷俗　外貌枉郊西子顰
江湖幾萬青年子　誰是真開真化人

評ゝ曰く俚言ゝ三人寄ゝハ文珠の

智慧といひ文那の先聖ハ三人行へ
ハ必吾師ありと今古の三人文明開
化の論とまし一得一失互ひに補ひ
助けて始て渾然ト文明開化に成
りしを先聖の格言俚言の憑虚あト
ぎる找知る歟し

開化の文那し巻の上終



# 開化の文那し巻の下

## 第二回

田畝間の政治論

山脇軒主人著

那處の村落なりしに一個の老人百姓鋤
を採りて畦を耕し居けるが此里の戸長
と見へ外套袴にて通りかゝりしが老人
百姓に對ひて頑兵衛どん毎常も健康で

力作つてやるかと言をらく見ハ鋤を安
頓て頻被りを除り那位らと思ひ
ゞ里正（未だ戸長とも）きんの開助どん今日ハ何處
へ行つ志やすまれと問へハ開助ハ立停
り興頃ハ公用にて東走西奔ゞ忙しいと
いへバ（ナント里正さん近日の御政事ハ
私共の青年間ハ見さ的も聞さ的も無
い事ばかり昔とも違ひ好ひ事ハ排地御



坐らぬといへバ開助ハ天を瞻め（未だ大
陽きんも巷西ぬも一此處にて政治の本
論を関せませふ偖今貴君の好ひ事ハ無
ひと云わるハ大きゐ丹田失方其様ゐ
去とも云ふハ政治の真理を知らぬも一
先づ世界萬國の政治大畧とつゝバ三つ
の違ひゐ御坐つて其一つハ國の君たち
人主地も人民も皆自分の心社とし取る

心與へて殺す心生ずる皆君の心しだ
いに道理にえづをさ狠意的政事でも人民
が如何をるとも心をらず政事に與る大臣
心門閥の人でなければ其官にあることを
を出来ぬ下の卑しきものい政事の片端
へも與ることをならず黔首と愚にもると
いふものにて亞細亞洲の諸國い大抵這
やふな政事ら多いあの政事い天理人情



にも背きたる至極悪るいものにつよい
國君人民の上に在りて土地人民を支配
すれども今云ふさやふなる天下は私有
とせば政事をもるにも道理に合わぬと
ふい無し卑しき我々の様なものを政
事に與ることとぶ出来人の自由を姑け
ぬ這様な難有き政事い西洋の文明開化
此國い皆この政事をするもとで御坐る

まゝ三つよハ貴き賤しきをしきて
て徳のある賢き人を選び年期を定め
て大頭領とし四年目ニ至さゝハ前の人
へ役をまきて又別の才徳ある人を擇
んで擧ゝ事ハ其れを擇ぶ仕方ハ其
國の人民ゞ先づ大頭領を擇ぶべき人物
と入札して其の人ゞ國の都城ニ會集り
て大頭領ニ成き人を入札し其札數

の多き人を擧ゝ事ハ國民も一同政
事ハ與り王極公平なる政事ニくとの名
高きものハ亞米利加洲の合衆國で御坐
ゝ今吾御國の如き上古神代より連綿と
打ち続き萬古不易ニて實ニ滿世界ハ鉦
太鼓で尋ねても変しく無い結構なる國
体ニて其國民ハ能く天神系統の一君を
戴き崇め奉ゝ心きとで御坐ゝ然ゝ難

有き御國体なれども世代の沿革と種々
いろいろ事も出来き因襲して理と合ハ
ぬ御法度なども多くつくれども王政御一
新の後ハ萬事舊時の弊しき習ハせハ御
用ひ無く西洋文明此國々の長い所と御
採りあつかれ億兆を赤子の如く御慈愛以
りて官人も品流で用ゆる事も多く卑賤
の吾々でも才徳き人いとハ怠慢様を重

ひ役とも多り士農工商の差別なく其身
の權を同ふするやうふなされ以前の
様と無理でも無法でも諸侯や武士と頭
と押しつけられ恨意い目よ逢ふ出とも
無く人民と自由を與へよ々と御世話の
いろハ此上も無き難有い事でハ御坐ら
ぬうまく學校を所々と御建設ふされ人
民と一字も讀めば生涯明き肯りて道理

し分らぬ知識も増さぬ犬猫同様にて萬
物の靈たる職分に恥ぬ様にと自分の身
を善くして下きる厚い御恤えとも知ら
ぬ入費に困るの課銭も多いの寡いのと
上を怨むやふな人は実に從来犬猫同様
にて世を送りし故の出と又地券の御制
度を設けられしも人民に斉き幸福をや
せぬ共外電信機の鉄道のと入民に

便利なることに入費も功勞を御厭はる
くなされるるを多く此人民の中には
愚痴て道理も分らぬを政府の民を御愛憐
なきる本意を知らぬものがるる也一徒
党一揆などをして罪に陥いるものを御
坐るれど頃て國中一般に文明の御政
事が行き届き人も賢くなり土地も
開け産物も多くなり金銭も澤山出来て

此上もなき我々の幸福なるに其真訳も
知らを文明の進歩に邪魔をする愚痴漢
い人外といふても好了的貴君もよく此
理を知つて世間の愚痴漢といてれぬや
ふにさつきやをと言細らに説き諭され
をドめて夢の醒さる如く感涙を流して
偖々里正さんの御談話にて精節分りも
し此這様ふ難有いもとも知りに御訳



云ふて過せしい実に殷の透ら天を窺
ふ愚昧の料見是らとい開化して一村の
文明史といつるやふにあり青年輩とも
導くやふにいきませる時い初春今此
處にて田舎戯樂の萬歳樂一曲舞ひて文
明の御代と目出度祝ひませふといつべ
開助手と拍て過つて改むるに憚らぎと
いふい貴君のこと実に感し入りま

然らハ吾等ハ太夫貴君ハ才藏まあらつ
ーやれと役割りを極めて立上り聲ちの
ーく謠ふを聞けハ
ヤレ芽出度や萬歳樂御代も栄ーて明
らけく治まる歳の初春ハ君の恵をや
春風のそゝぐぬ隈も中くまなく塵まなと
ーき賤の身も天皇乃大御心を仰ぶぐ
らーしたを候ひて八十余州の隅ゝ隅



まで文明開化ふ推し移り亞細亞洲中
大日の本の光り輝く御國威を廣き地
球の端まで也及ぶやふゝと老の身の
越ぬ國ふる白山のゝしらハ白くあな
ぬとも君ハ齡ひの萬々歳萬歳樂と御
祝ひ申し猶も若ゝて長存へん
と舞ひ謠ひて興じつゝ我家へゝきハ帰
りけ李

評に曰く商君いくらかの民に始
を共にすべくも其成る状非ふべ
しと善き事も見あれ聞馴もぬるちに
悪しきと思ふに凡夫の情態にて片田
舎も住めば都といふる俚言もいまの故
ふ文明の難有政事も馴もぬ間に舊時
の馴もし政治の下に住むと好む是痴
人の情にて憐むべき事あらばや今



此戸長の頑民を説諭する実に寒しき
と得るものと謂ふべし此界政治の區
別玄悟らし免終りに吾皇國の政体を
説き今世生學問の輩が國体の何物と
ると知らを喋々暴論を吐くものに此
すれに眯るとと萬々旦老農も迷夢一
覚感激の余り塊を擊て萬歳樂の曲に
作り聖代文明の恩を祝せしに実に政

むるゝ憚りなく良民にて質朴想ふべし紋袴の子弟それを見て心に問ひ老農に恥ることあらん

## 第三回

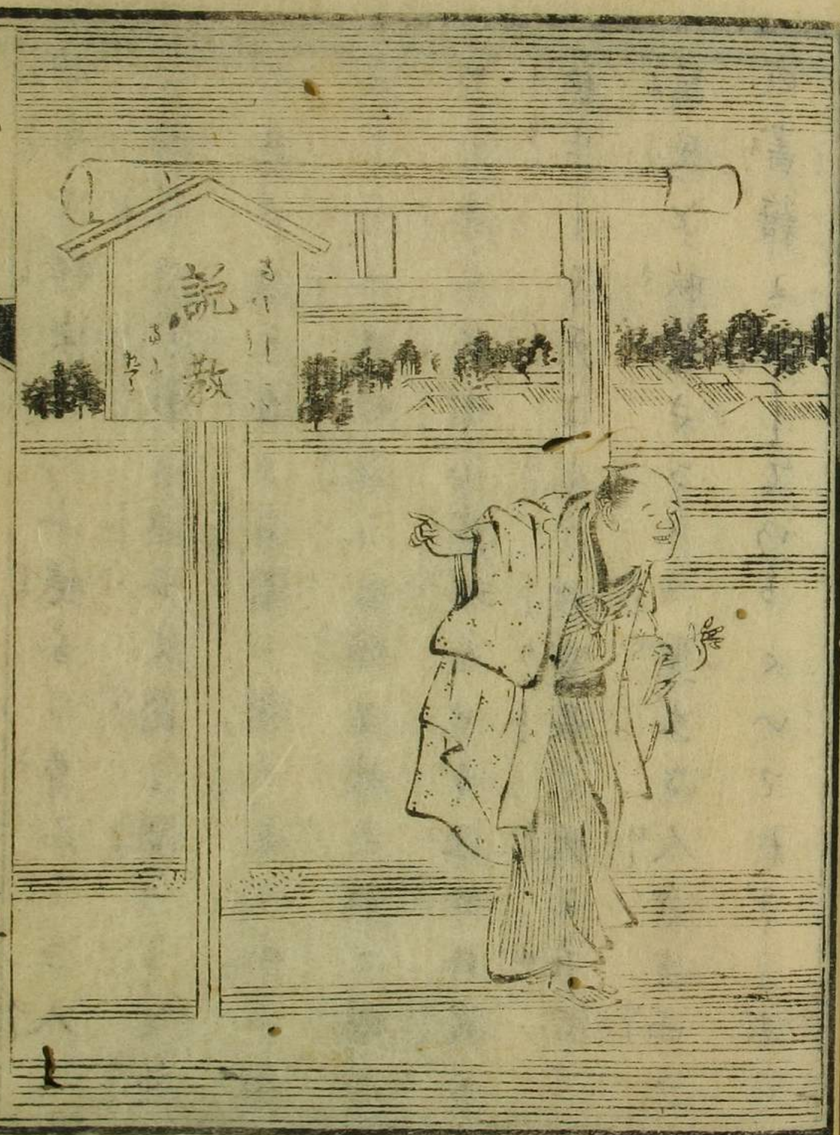
### 説教婦途の宗旨論

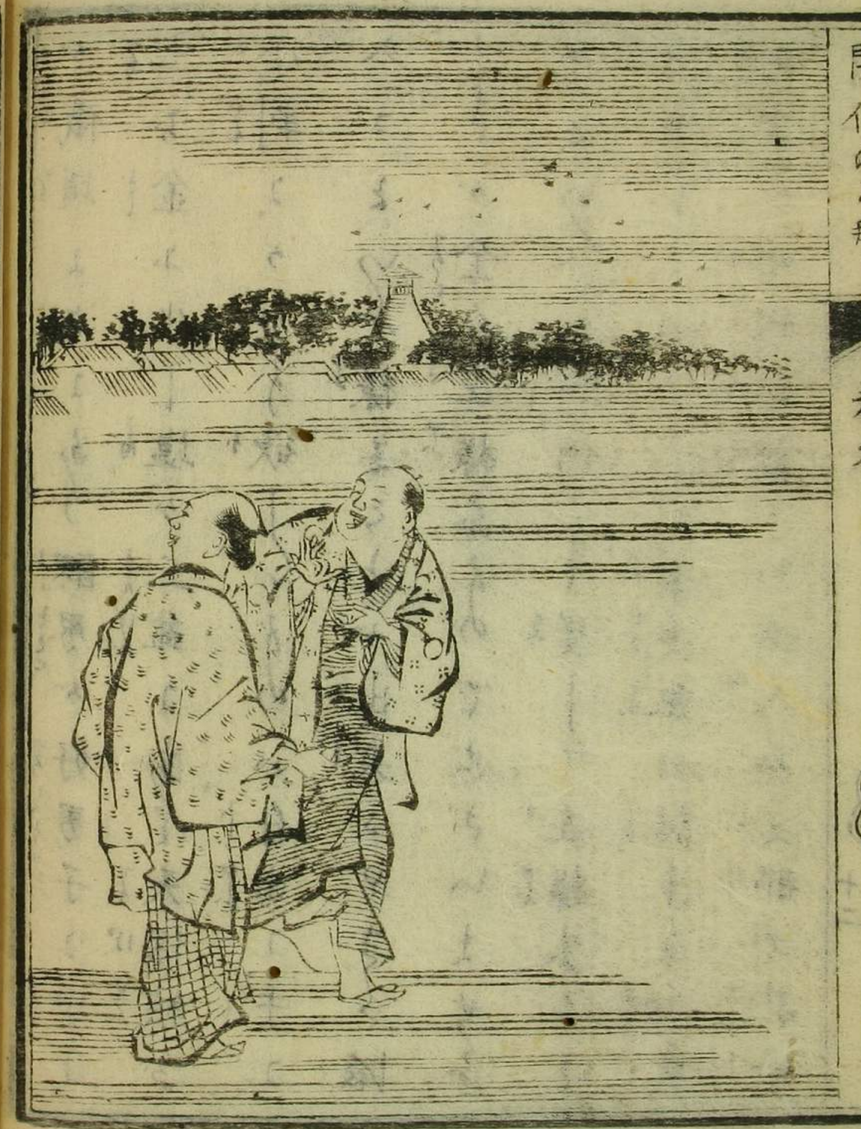
往来賑ふ神明の境内詣で来る人数多あり中に二人り老人説教聴聞の帰途と見へ信右衛門さん今日の御説教も誠に〻ありがたくて思わず涙が出ほど敬神愛國の御さとしが實に肝に銘じまし御高札にある通り切支丹ぢい ふハ中々這様な難有い事ハ御坐りませいとゝ〻バ一人その老人実に貴君の云わるる通り有がたい御さとし中々切支丹ふどゞ及ぶことでい御坐りませ

いまゝ私ハ洋學の先生の談話を聞きしに凡此世界の教法ハ数多くあれども大きと二つに分けて多くの神に信心する教と唯一つの神と信心する教との二つに切支丹けれども一つの神を信心する教法ドやと云わをまゝなれつゞ一人の老人ハ切支丹ハ魔法とつひく死しさ親よりも子ゝ逢りせ不地



が俄頃に海に成り醜男が好男子に變ド土ぶ金ふ化し塩が三盆に成ぶ天保銭が小判に成ハ欲しいものハ自由に手に入ることゝいふ様なことが出来るとさゝ海しが全く左様ふものでおざいませふゝと云ハ如何して変して左様なことハいやいとゝいふ其先生の話しに切支丹宗の祖師耶蘇といふ人ハ支那で孔子


説教



印度で釋迦といふ様なる尊ふとき人
て萬民の邪教に迷ふて悪に陷いるを救
はんとして遂ふ其身は猶太といふ國
に二人りの盜人の間に挾まれて磔に
ひらりとされども靈魂死せず三日の後ふ
蘇生して天に上り神靈長く天に在つて
萬民を救護さる神聖なる人ぶと西土
の書籍に記しているといはれきしれき

て其後耶蘇の徒弟が諸國へ散りて教法
の種を蒔き日を逐て実を結び諸國に此
教法が弘まる逐次世を経て宗派が澤山
に出来旧教の新教のとて旧教の人は新
教の人を仇の如く思ひ新教の徒は旧教
の徒を敵の如く看做し本と善を勧め悪
を懲す教法も固陋凶暴の資となり歐羅
巴中世に至つて耶蘇の盛んなるを嘗

倡の威勢甚しくまふり宗門異同の為に異
無き人を屠戮し西班牙王非立といふ人
已に信仰する所ふ異ふるを以て耶蘇
宗徒三百萬人余を屠殺せしまどふとい
りて教法の本旨ふ失ひ闘争や人を殺せ
資とまりしふ教祖耶蘇の罪人ふて誠に
悪むべきまとまとまとまし理學の追々盛んふ
ふ隨ひ此風全く止まさまとまし現今



でも英吉利ふどもふふてすさんと宗耶蘇
教と称し宗派十九ふを奉ぜる人でいけばば國
政大臣ふいせぬといふ法がいふふ其
外猶太教といふい余程上古ふ流行せし
宗旨ふて耶蘇教の前盛んふ猶太國古昔の國
名ふ行はれまき四々教といふい太耳格
といふ國一般ふれを信じ其外亞細亜亞
非利加の中ふも信向まをとろいふ近

頃い天竺より此宗旨を信仰するもの少
影多出来て却つて本尊の釈迦教へい
地に落るといふ沙汰なく此宗旨の祖師
いまはわつとといふ人にて亞拉比亜と
いふ國の駱駝飼にて深山の中にて多年
行をなし天の使ひのと偽言を以て愚
民を惑はし其後諸國を切り取て自ら教
王といふて暴威を振ひし人ぞといひま



さて此等の宗旨は皆一つの神を祭る
教法なり多くは神を祭るは婆羅門教釈
教の二つにて婆羅門教は釈迦より古
く今でも前印土に行はれ其説虚誕多く
釈教と同じく木佛金佛などを拜ま人情
にも疎く今日本でも往昔より釈教を威
んにてその為に王法の益もいれば悪ひ
あるもいまとなる文明開化の御代に

を人智に隨つて開け佛の空理は蓋し
人心少なくいなれども萬民の心を
宗教が浸潤をして居る故に今天下の神宮
諸寺諸山の名僧智識として空理を談ぜ
ず人心に切実肝要なる敬神愛國天理人
道を明らかにする三ヶ条の譯を能々説
き聞せ文明開化の良民に成る様にとの
厚く御趣意をれ故貴君方も能々此理を



合点して怠りなく諸所の御説教を聽聞
し行ひよ不動や地藏の開帳などに衆
生を華美にして糸詰をるに入よぬこと
を赤いけどふ迷はぬよふ木佛金佛
石佛に情の無きに誉めさ咄でいない
情が無れば人を助ける利益もなしこれ
を信心をるに無益なること夫よりは惟
心に御説教の趣旨を身に行ひ後生を願

ふの未来と頼むのと白痴さと上間
賞さぞと此世に生まれて人間の職分の欠
ぬ様にされと其先生の談話で御坐
まさといふ折うゝ浴室帰りの若い
もの聲張り揚て豊後の一下節

思徳意の曲者

解脱仲達摩の弟子白痴さん人を作ふ
西洋の真のふ寺遊ばれて祝ひ

切支丹ゝ我國の宗天の
京の神仏ゝ正しき國振りを見て
恥かしい金倫理ゝ拘ふ人の國賠
といふ古ゝ古の祝ひ岩を明治ふ男
学の宗のそのいにとふを嫌しふ
ものの説教物ひ聞きしきゝ志やんを
と唱ひ行くを二人りの老人を打ち聞て
信右工門さん将門の文句で宗教の沿革

を能く説き盡しまゝ
評に曰く教部三條の令出て弥陀の
毫光滅せんと欲し不動も開化し
漸く脱劒せんとを思ふ宗教ら天
下人民の心を固繋する所のものふ
して其政治上干渉を亦大ひに
り彼西洋各國の如き上帝王より下
庶民に至るまで礼拝日ふら各寺院

に詣で真神を拜せ上の好む所下に
甚より甚しきものありと今吾邦に
も一六の休日ふら上天子より下
等外史に至るまで大教院に詣で玉
ひ信心礼拜其説教を聽聞し入心の
向ふ所を示し玉ハゞ果して下之に
り甚しく偶像礼拜の蠻風地を拂ん
歟曲肱子の説教歸途の宗旨論説き

得て妙あり且耶蘇の邪宗を非るを
説きしるす又妙あり哉を仮りて我
邦舊来の偶像礼拜の弊を破るを足
れり頃て此書の世に行はるゝや幼童女子も
あれを読まば閑帳狂顛病より至極功
能ある妙藥ならんと同気樓同病評を
開化の花形し巻の下終


書肆

芝三島町　和泉屋市兵衛
通油町　藤岡屋慶次郎
馬喰町　森屋治兵衛
同　山口屋藤兵衛
両國吉川町　大黒屋平吉　發兌
武州忍行田　博文堂
中仙道本庄宿　同　出店　梓